**信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム**
**実施状況および成果**

| | | |
|---|---|---|
| プログラム名 | **グローバル人材育成のための北欧教育視察プログラム** | |
| 学部・研究科名 | 教育学部 | |
| 実施期間 | 2016年3月5日～3月16日 | |
| 研修先(国・都市・施設名) | フィンランド(ヘルシンキ)、スウェーデン(ストックホルム) | |
| 参加学生数　：　6名 | | 知の森基金からの支援者　：　6名 |
| プログラム概要 | 本プログラムは、教員志望の学生に海外の先進的な教育実践に触れる機会を提供することで、グローバルな視野をもった人材を育てるという意図から、フィンランド及びスウェーデンの学校(幼稚園、小学校、中学校、高校段階に当たる)や学校法人本部等を訪問した。 | |

実施状況・成果

本プログラムは、教員志望の学生に海外の先進的な教育実践に触れる機会を提供することで、グローバルな視野をもった人材を育てるという意図から、フィンランドおよびスウェーデンの学校(幼稚園、小学校、中学校・高校の段階に当たる)を訪問する研修旅行を企画した。

3月7日(月)にはフィンランドの学習指導要領策定等で中心的な役割を果たしているヘルシンキ大学附属学校を訪問した。3月8日(火)には、エスポー市にあるサウナラーデン学校を訪れ、プログラミング教育の先進事例に触れたほか、最新の学校建築を見学した。また、3月10日(金)には、フィンランドにおけるスウェーデン人学校であるクロノハーゲン低学年学校を訪問し、多言語政策の実態や異文化理解について学んだ。3月14日（月）にはスウェーデンのヴィットラ・ルーマ・バルク学校を訪問し、多言語による授業を見学した。3月15日（火）にはヴィットラ・インターナショナル学校を訪れ、午後にはヴィットラ学校グループのストックホルム支部長と面会した。学校訪問後には、2時間程度のリフレクションを行い、各参加者が感じたことや我が国への示唆等について話し合い、理解を深めた。

また、今回のプログラムでは、学校訪問以外にストックホルム大学大学院に留学する日本人学生や、ウプサラ市に住むスウェーデン人で日本語が話せる高校生と面会した。教育は生活と密接な領域であることから、地元の人がどのように暮らし、子どもたちがどのような環境で育っているのかを見ることは極めて重要だが、学生たちは特に年齢や興味が近いことから、活発に情報交換をすることができた。学生たちにとっては、自分の専門とする分野(教育)において海外の事例を目にすることができ、大変意義のあるプログラムだった。学部および国際交流課には、事前準備の段階から多くのご支援をいただき、安全に渡航することができた。今後も同様の取り組みが続けられることが望まれる。

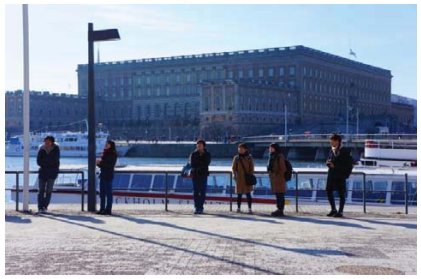
学生の声①－教育学部　学生

今回の視察やリフレクションで、フィンランドとスウェーデンの学校教育と日本を比較し、構造の違いから新たな疑問点や自分が抱いていた偏りを見つけることが出来た。今後の私の課題は、日本の学校教育の意義に立ち戻ること、ラーニングスペースと学習効果を探ることである。近年、日本の学校教育では教師の多忙さが問題になっている。教育に対する様々なニーズにこたえるため、教師は授業以外でも部活動の顧問をするなどとその活動は多岐にわたる。そのため、本来の教師として教室の子どもと過ごす時間が減っている。今回視察にいった国々では、教師の管轄と他の教育的なニーズに明確な線引きが存在していたと考える。例えばSaunalahti Schoolは多目的学校である。しかし、様々な活動が教師に負担を与えているわけではない。むしろ積極的に外部、地域と繋がることによって教育に求められる期待に対応しているように考えられる。そのような組織的な枠組みを変えることは、社会的構造が根本的に異なるため難しいかもしれない。しかし、教師が教室で注意する様々な規則が必要であるのか、は実行できる裁量がある。食育や躾、列に綺麗に並ぶ、姿勢よく座るといった授業に直接関係のない規則について、全てを背負い込むのではなく、考え直し、分けることが必要なのではないかと考える。
また、フィンランドは特にスウェーデンやロシアといった大国に挟まれ、物資も少なく、自国の文化継承のための国民教育がはじまりであった。ここに日本と類似点を見出せる。どこから転換したのだろうか。また、日本において北欧教育が素晴らしいという話が多い中、日本の教育はどうなのだろうかと疑問に思う。額面通りに受け取ることなく考えを進めていきたい。環境についても同様である。環境はどれほど学習に作用しているのか。当たり前だと思っていた設計や視覚支援、掲示物がどれほど固定された概念に依拠しているのか、他に取り入れることはできないのか、考えていきたい。

学生の声②－教育学部　学生

地域との連携を大事にしていきたいという日本とは違い、学校と地域が１つのコミュニティーの中にあり、連携していることや協力していることが特別なことではなく自然である。先生たちも特別な立場なわけではなく、学校や地域の一部であるように感じた。日本は学校が地域の中にあるのに地域と切り離してしまっているようだ。学校の状況や実際の現場をなかなか知る機会がなく、先生と保護者で連絡を取り合うことは多いが学校全体と保護者や地域が関係を深めることが大規模校や都心の方では少ないように見られる。
一斉授業だけでなくアクテイブ・ラーニングを取り入れつつある日本の学校。やはりそこには子どもたちの学びたいという気持ちが大切なのではないだろうか。自分の小学校や中学校時代、基本は黒板を写すことが学びになってしまっていた。しかし先生の話の中には今でも印象的な体験談をしてくれたことやおもしろい話など授業に関わりながら、話して聞いて質問したことが後から思い出しても鮮明に覚えている。ただ授業を受けるのではなく学びたいと思えるようなきっかけが作れるような環境や授業ができるようになりたいと思った。

ストックホルム市内観光



ヘルシンキ大学附属学校の授業参観